2001年4月20日
八幡事業所　Tel.Fax 672-7595
小倉事業所　Tel.Fax 571-2299

さわやか

第51号

発行者
通院介護センター
さわやか

『ふれあい伊万里』開所

八幡事業所　高原由美

平成十三年四月一日佐賀県腎協、通院介護支援センター「ふれあい伊万里」の開所式が伊万里市の【ステーションベルズ】にて開催されました。

この日は、お天気もよく、桜も満開に近く、心華やかな中、行われました。

佐賀県腎協では、四ヶ所目の通院介護支援センターとなり、佐腎協の富崎会長、事務局長の早田さん、他皆様のご協力により、これで佐賀県全域をカバーできるとの事で、大変画期的なことです。

地元の国会議員、伊万里市長が来賓としてお祝いに来られていました。「さわやか」の江頭会長も駆けつけお祝いの言葉として《県全域をカバーできるのは、素晴らしいことであり羨ましく九州で誇りに思う》と言っておりました。

その後、「ふれあい佐賀」のコーディネーターの最所さんより「ふれあい伊万里」の設立までの経過報告がありました。佐腎協の通院介護支援センターは他に一ヶ所ありますが、患者のボランティアが多く一般のボランティアが少ないと言っていましたが、「さわやか」はそのまったく逆で、患者のボランティアが少なくなかなか上手くいかない世の中だとつくづく思いました。

開所式終了後、交流会があり食べきれない程の料理に囲まれて透析患者というのを忘れて食べて飲んでしまいました。どこの誰とはいいませんが、乾杯のシャンパンがあまりにも美味しく三杯もおかわりをしていました。楽しく歓談をしていた時、富崎会長は今後、北九州腎友会のようにホームヘルプ事業をたちあげて通院介護と提携出来るようになればいいとおっしゃっていました。

楽しい時間もあっという間に過ぎお開きとなりました。

「さわやか」も今年五周年を迎えますが、初心の気持ちを忘れずに努力していこうと改めて心に誓った一日でした。

介護保険と移送サービスの現状

「さわやか」会長　江頭博幸

介護保険が実施されて一年が経過しました。準備不足のまま開始され、色々な問題が噴出しています。

保険料が高い、介護度の基準が曖昧、ケアーマネージャーの仕事が激務などなど……「さわやか」の関係では、通院問題があります。

介護保険には、移送サービスは含まれていません。このことで、一番被害を受けるのは、透析患者です。

ご存じのように、透析患者は週3回の通院があるのでどうしても通院介護が必要になります。

北九州地区では、介護タクシーが、無料で送迎をし、全国的に話題になりました。

タクシーの運転手にヘルパーの資格をとらせ、病院の玄関からベッドまでの、身体介護及び家の玄関からベッドまでの介護をします。

この介護をすることにより介護保険から身体介護の料金が支払われます。

タクシー会社は、送迎は無料でも、介護保険からの収入で採算がとれるということで無料送迎をはじめました。

当初は、国土交通省から、みどりナンバーのタクシーはお客を送迎して、料金をとるのが当たり前で、無料で移送サービスをするのは、法律違反であると、無料送迎にクレームをつけました。

このクレームに、タクシー業界が反対し、罰をうけても無料で運行すると抗議を申しこみました。

その抗議で一旦は、無料送迎を認めました。この決定に厚生労働省も賛同しました。

四月にはいり、厚生労働省は、新たに、送迎のみで介護のないものは、介護保険の適用はしないとの通達を出しました。

送迎タクシー問題は、このように一進一退を繰り返し現在に至っています。

介護タクシーは北九州が中心で、他の都道府県では皆無に等しいのが現状です。

はじまったばかりの介護保険、二年後に見直しがあるそうですが、誰にも公平になるよう、善処されることを望みます。

通院介護センター「さわやか」を利用して

難病連会員　樋口かよ

私は通院介護センター「さわやか」を利用してもうすぐ三年になります。最初知人から、「さわやか」の存在を聞いた時は、たいへん驚きました。知人が特に強調して何度も説明してくれたことは、北九州市内の通院なら距離に関係なく、料金が片道三〇〇円だということでした。知人は私が門司からいつもタクシーを使って病院に来ていた事を知っていたので、その点を特に強調してくれたんだと思います。だから私はその料金に最初驚きました。今、その知人に感謝しています。ちょっと料金の事ばかり言ってしまいましたが、いつも私は片道三〇〇円でいいんだろうかと思っています。今、私は小倉の方に引っ越して病院が近くなったんですけど、病院に行くまでのちょっとの時間、運転ボランティアさんとの会話で本当にあっという間に病院に着いてしまいます。車の乗り降りも、朝は特に動きが鈍いので自分のペースでゆっくり乗れるのはほんとうに助かります。利用日前日に必ず、小倉事業所のコーディネーターの方が、何時に誰が伺いますよと連絡して頂けるので、いつも安心して私は、利用しています。私も次の通院日が決まったら早めに連絡するよう心掛けています。私は病気になって何が一番大変かと聞かれれば、やはり病院に毎月、通院することだと答えます。ほんとうに「さやわか」と出会えてよかったと思います。又これからもどんどん利用したいと思いますので、「さわやか」のボランティアの皆さまよろしくお願い致します。

編集後記

桜の花もあっ！という間に散ってしまいました。また、来年もきれいな花を咲かせてネなどと殊勝な事を思う今日このごろです。事務局より患者さんにお願いがあります。患者さんの中には送迎ボランティアをタクシーと勘違いされてる方がいらっしゃるようですが、ボランティアの方々は善意のみで活動してくださっています。相談などありましたら、先ず事務局へ連絡ください。ボランティアさんには感謝の気持ちをもっていただきたいと思います。

長月の九日まで にぶんみたる
十日の菊の花開けなむ

「十日の菊」はこれより古へ、一一一一六年（永久四）成立の『永久百首』の秋にこうある。

とある。

また『平家物語』巻第十一の「赤間合戦」に、法会にまこにあわなかった花と並べて「六日の菖蒲」をあげ、屋島の合戦に遅れた梶原景時をあざわらうのに用いている。

とあるが。

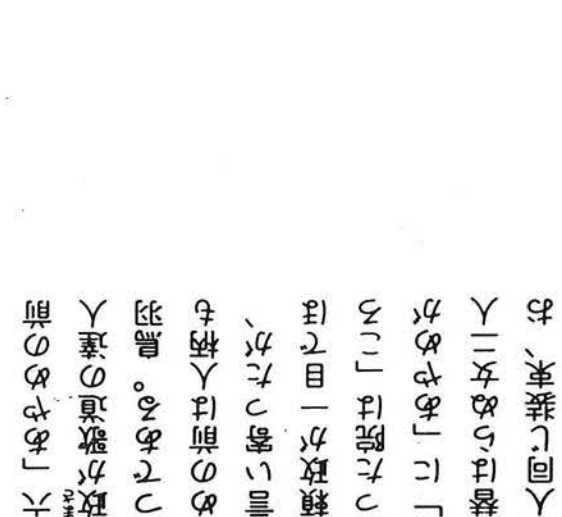
引く人もなきわが身なりけり

まことに、なんとも今は日のあやめ草いうかせんなし。

六日のあやめ、十日の菊

どうしても時機に遅れて役に立たないことを言う。五月五日のショウブ、九月九日の菊であってこそ役に立つのである。それにまにあわなかったのだから「あとの祭り」と同じである。

「六日のあやめ」は一二四四年（寛元二）成立の『新撰六帖』巻の一に、



五月の五日の片夕暮れ、
はてしまつた。これを知つた院は「こころ
年・丈・色かたちも少しも替はらぬ女二人
に、あやめを見して、三人同じ装束、お
なじ襲に」して、引き当てたら、そちに
取らそうと、「頼政の眼精」をためす。
頼政、ほとほと困り果て、

さすがに沼の石がさを水越えて
いづれかあやめ引きそわづらふ

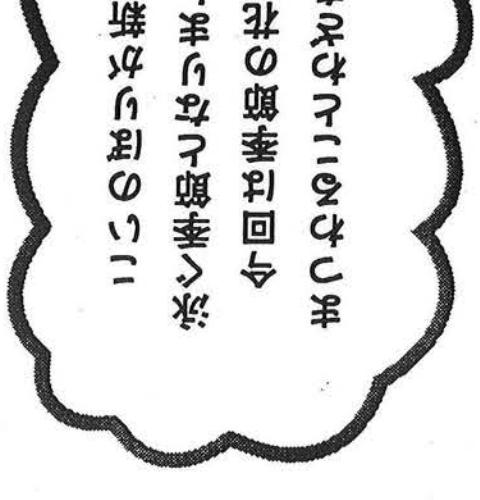
とよんだ。

院は「御感のあまり」みすからあやめの前の手を取って頼政に賜わった。この話は『太平記』巻第二十一にも出ている。これが謡曲や浄るりに採られていくうちに、アヤメもカキツバタもよく似た花で区別しにくいことから「いずれがあやめ・かきつばた」と転じたのである。

いずれがあやめか・かきつばた

どれもよく見えて、選ぶのに困る場合のたとえである。

「源平盛衰記」巻第十六「あやめの前のことと」は、武将源の頼政が歌道の達人であったエピソードの一つである。鳥羽の殿であってこそ役に立つのである。



ここの庭り が新緑の空に気持ち良く
涼く季節となりました。
今回は季節の花である「あやめ」
まつやのこしとやをを紹介します。